特別 × 座談会

「書く力」を伸ばす英語の授業とは？

中邑光男 × 勝　啓一 × 内林　拓

英語４技能の１つ「ライティング」。「ライティング」と言っても，センテンスレベルの和文英訳からパラグラフライティングまでさまざまな形があり，指導の方法もさまざまです。今回は，長年英語教育に携わり，『ジーニアス英和辞典』『同和英辞典』の編集主幹でもある中邑先生，長年高校で指導をされていたベテランの勝先生，今まさに高校で指導をされている若手の内林先生に，ご自身の取り組みや指導，評価の方法について語っていただきました。（聞き手：編集部）

※この座談会は 2024 年８月にオンラインで行いました。

――まずは高校で指導経験がある勝先生，内林先生から，授業で行われた「書く」活動を教えてください。

勝：これまで高校４校に勤務しました。進学校では生徒のニーズから和文英訳の指導を中心に行っていましたが，その後の２校では教科書にあるテーマをもとにしたライティング活動が主でした。完全に自由に書くのは難しい生徒も多かったので，タスク型というか，テーマや設定を指定する方法は有効でした。「何を書けばよいかわからない」という生徒には，スパイダー図などを使って話を広げられるような支援をしました。

内林：私は前任校，現任校とも，タスク中心でライティング教材を使った英作文を主に行っています。和文英訳を指導するというよりは，活動の中にライティングを取り入れるというのが近いです。

――授業の流れとしては，ライティングはどこに位置づけられますか。

勝：ライティングの課題は教科書の Unit 末に掲載されていることが多いので，最初に予告をして心構えをさせ，最後の5分でやりました。

内林：私も自由英作文に関しては，教科書レッスンの最後にタスクアクティビティとして設定しています。やはりレッスン冒頭で生徒に予告することが大切だと思います。「論理・表現」の授業では教科書のモデル文の型を意識して学び，その型を踏まえて書く練習をする機会を設けており，書くことを念頭に置いて授業を受けてくれます。

――大学では講義や授業の中でライティングに取り組むことはありますか。

中邑：私はプレゼンテーションが主体の授業を行っています。プレゼンは内容作りが大切ですが，それは日本語で行って，英語に直します。そのため日本語能力が必須ですし，和文英訳の力も必要です。

勝：私の実感や中邑先生のお話から，英語教師は英語の力だけでなくプレゼンのアイディア出し，内容・文章の論理性といった英語以外の力とその指導力が必要になっている気がします。

中邑：そうですね。英語ライティングの指導では英語の指導だけでなく，それ以外の分野もカバーする必要があります。論理の組み立て方，論理的な話し方はユニバーサルな能力なので，指導したいし身につけさせたいですね。

――英文の内容だけでなく，文法的な正確性を見る機会はありますか？

勝：高校３年は受験を意識して文法の正確性を気にするので，文法指導の機会も増えます。中邑先生のおっしゃった学問的ユニバーサルな能力を身につける必要もあるので，１～２年は内容重視でそうしたところを固め，３年で内容も文法も見る方がいいかなという考えです。

内林：文法を意識しすぎると内容がおろそかになるので，バランスが本当に難しいです。私は「英語コミュニケーション」は内容重視，「論理・表現」は文法重視でやっています。勤務校の生徒は，文法問題を解く力は身についていますが，学んだ文法事項を使ってアウトプットする，活用できる段階にはたどり着けていないなと感じますね。

中邑：勤務する大学では英語が苦手な学生も少なくないので，私の場合は『ジーニアス総合英語』を使って指導し，質問を受け付けたり，毎週テストを行ったりしています。近年は学生の英語基礎力が不足している前提で，英語力全般を補うよう心がけています。

勝：私が勤務している大学でも，英語が苦手な学生が多いです。高校で習ったはずの文法事項を忘れている，あるいは文法問題は解けても，正確に読んだり書いたりする力が不足していると思います。

――「流暢さ」を見る基準などはありますか。

内林：流暢性はスピーキングの方で意識します。ライティングは語数を指定することが多いので，時間内に書けるかなどは見ますが，評価の主眼にはしません。

中邑：読み手としては，話題が滑らかに繋がっているかが大切です。学生が書く文章だと，パラグラフをつなぐ語句や文が抜けいたり，論理が飛躍してしまっていたりすることがあります。ですから，論理の流暢さが大切だと思います。

勝：私も中邑先生と同じ意見です。論理が繋がっているか，一貫性があるか，といった観点の比率を高めた採点を行っています。高校でも内容について重点的にフィードバックすることはよく行いました。また，リテリングを書く活動として行ったこともあります。リテリングをした後に書かせると，生徒は文法的な観点についても気をつけるようになりました。

内林：リテリングはよくやります。各パートのまとめとして行うことが多いです。

――これまでのお話はある程度「書ける」前提でしたが，「書く力」を伸ばす取り組みはどうでしょうか。

内林：「書く力」の要点は文法の力や論理とその一貫性だと思います。論理性・一貫性については，構成や

Profile

中邑光男（なかむら みつお）
関西大学商学部教授

『ジーニアス和英辞典』の校閲より「ジーニアス」シリーズの執筆編集に携わり，現在，『ジーニアス英和辞典 第６版』，『アクシスジーニアス英和辞典』，『ジーニアス和英辞典 第３版』編集主幹。辞書の他，『ジーニアス総合英語』の編集主幹にも名を連ねる。

展開の順序などの「型」を教科書のモデル文などを使って教えています。加えて，たくさん書くことが大切だと思うので，書く機会を多く設けています。

勝：実業系の高校や専門科では，英語の単位数が普通科に比べて限られているので，授業の中でバランスよく指導するようにしていました。

中邑：ライティングはアウトプットにあたりますが，限られた授業時間でインプットはどうしていますか。

内林：インプット・アウトプットのバランスは悩ましいです。私は「英語コミュニケーション」ではインプットがメインで，最後に少しアウトプットという流れです。本当はもう少しアウトプットに取り組みたいですが，現状は文法や音読，読解などのインプットで7割くらいです。

勝：インプットを増やすことはアウトプットの幅を広げることに繋がりますよね。大学では文学作品に触れることで，豊かな英語の表現を学ぶことも行っています。

中邑：勝先生のインプットの話に少し関わりますが，大学では，英語を流暢に話せる学生が昔と比べて増えているものの，英語を書かせると肝心の内容がボロボロなことが多いです。大学では，流暢に話すだけではなく，ライティングを通じて伝えたい内容を効果的に伝えられるよう指導しています。

――多数の英作文をどのように，またどの程度添削・評価されますか。

勝：商業高校に勤務したときは，文法よりも内容を重視した添削や評価を行っていました。内容に関する質問を重ねて完成させていく方法を用いました。文法事項について指摘するよりも，内容についての質問の方が生徒自身も自分の考えが深まるのでよかったと思います。文法は，クラスに共通して多かったミスを取り上げ，クラス全体で共有する形を取りました。

内林：添削に関しては悩みがつきません。以前は文法も細かく見ていましたが，時間と労力がかかるわりに生徒は赤字を見直してくれないどころか，赤字が多いとショックを受けることもあり，加減するようになりました。勝先生同様，よく見られるミスはクラスで共有しています。

また，課題にAIを使う生徒がおり，自分は何を添削しているんだろう，という気持ちにもなったことから，添削は希望者のみに行い，添削された内容を確認してリライトさせるところまでを１セットで行う場合もあります。

勝：クラスによっては生徒同士での添削も行いました。内容に関しては生徒同士で確認・修正して提出されるので，教師の負担が減らせます。

内林：私もやったことがあります。具体的な指摘が難しい場合は，気になるところに下線を引かせる程度でも，生徒自身が見直すきっかけになって効果がありました。

中邑：私はプレゼン原稿を添削することが多いのですが，大学生も添削しすぎると落ち込んでしまいます。そのため指摘は10箇所までなどと決めて，その範囲内で行うなど，少し手を放すようになりました。さらに，生成AIの力も借りて，教員は生成AIには難しい，内容に関する添削に時間を割きます。

内林：私も生成AIを使ってみて，内容的な指導に時間が割けるようになりそうだということは実感しています。

中邑：「達意の英文を書く」ことは，英語教育の最終目標だと思います。単に英語ができるだけではなく，英語的な考え方をし，質の高い情報を取り入れて内容や構成をまとめる，とハードルが高いですが，そこに臆さず試行錯誤しながら取り組んでいきたいですね。

Profile

勝　啓一（かつ けいいち）
大和大学教育学部教授

滋賀県の県立高校・教育委員会勤務を経て，現職。『ジーニアス英和大辞典』などに携わる。

内林　拓（うちばやし たく）
滋賀県立石山高等学校教諭

生徒のモチベーションを引き出す授業を心がける。弘済会しが教育賞ユース部門入選。